

勇敵な部下討

歩四七五ノ附

歩兵中尉 山際義鷹

杭州湾上陸後六日目の十一月十日 算を
 乱して退却する上海軍を一挙青浦附近に殲
 滅すべく急進に急進 この日午前九時尖兵
 中隊たる第九中隊は城東三料の坳奥で敵と
 銃火を交へて居りました 其の弾は数々の
 附近にも落下してゐました
 我小隊は命に依りその右翼に進出する事に
 なりました もう一つづくに攻東前進してゐ
 ると思つてゐた九中隊の右翼小隊は 敵前
 千米附近の墓地に釘付けになつてゐる 聞
 けば集中火激しく前進困難とのことだす
 斯うして居る間にも絶え間なく敵弾は飛來

ぬます 更に左方の竹藪
 けく／＼と無気味な音が
 聞えて來ます 兵力を増してゐるらし
 く こんで來ては後田の中に見えなくな
 我方は墓地を利用して猛射を浴せ小銃小隊
 の前進を掩護し 分隊長に命じ様とす時
 「小隊長黙こんな所に長く居ると危い 前
 進してあの部落まで行きませう」と
 白井の隊長の意見 よく見れば一ヶ小隊程
 其の部落に前進してゐるのが見えます
 よし前進 と云ふもあへず白井は早田園に
 飛び出し リスの様を敏活で前進します
 部下も 續いて進出じと 或は走り或
 は伏せ 部落にたどり着きました
 此の時早くも白井は適切に部下を指揮して
 敵の増加部隊に独断射撃を開始し猛射を浴
 せまゐります その機敏さ 良くやつて呉れ
 ると心で感謝する程でした 敵の倒れる

様は又痛快この上なしです 第二分隊も来
ました 小さい此の部落が満員になりました
た 愈々我々は心強くなり命中弾を送り
午後四時頃九中隊の攻襲に際しては 火力
を十二分に登揚して思小存分協力が出来ま
した

かく夕時暗迫る頃敵を退却せしめました
この戦斗で臼井分隊の機関銃は油槽を貫通
され 又損壊を曲げられました が應急修理
で奮戦しました

後で松田大尉殿(当時の中隊長)から君達の前
進する姿は実に勇敢だった よくやつた
當時墓地に居た兵は数名負傷したよ と賞
めて頂きましたが これは実に臼井分隊長
の機を見るに敏 且つ勇敢適切なる所置の
賜であると思ひます

轉戦三年臼井を初め当時の分隊員も大部分
元気でおりますが あの時の事を語り合つては

良く生きてゐたものだ と お互に武運の強
きを祈つて居ります

「死んでも南京へ行く」

小隊長最後の言葉

歩四七 Ⅲノ所
歩兵上等兵 藤元安治

金山 松江を抜き更に天文台にありの大敵
を全滅した我々の志気は正に天を衝くの概
がありました

青浦城も唯一押しに押しつぶせと急進に
急進を続けました 青浦にかゝる所で又
しても敵の銃声 遠く近くから盛んに撃つ
て来りました

昨日以来尖兵配属であつた 我機関銃は早
速此の敵と應戦しました 天然の地形地

物を利用し、その上数を頼みとする敵は、
なか／＼頑強で退却の様、見せません。
尖兵は敵陣雨飛の中を各個に躍進し、進
致しますが、此又十数米のクリークの間に
思ふ様に前進出来ませんでしたが、
敵は段々数を増して、愈々狂気の如く乱射
して我が進軍を拒みます。前進路は稲田で
す。敵の位置は少しも判りません。
我が機園銃は渡河する尖兵を援護する為に
台地も求めて前進致しましたが、一面の稲
の爲に敵の火器の位置が発見出来ません。
この時小隊長志賀少尉殿は雨籠する敵陣の
中に立ち上られ、敵々エツコの位置を危険
も忘れて探し求められました。
良し判った。小隊長殿の嬉心に満ちた声で
す。

目標 前方森の右端 三〇〇と大きな
声で命ぜられ、尚細々と指示して居られま

した

その時不幸、敵は小隊長殿に命中しました。
パツタリ倒れられました。気丈な隊長は
大した事はない、早く射て射てと躍気と
なつて指圖されます。その隊長の仇とばかり
銃も裂け下と猛射を浴せました。時
十一時四十分でした。
緊迫した状況の中とて衛生兵も近くには居
りません。せめて止血をと百方手段を盡し
ますが素人はかり、気は焦ります。が思ふ様
な手當が出来ませんでしたが、
衛生隊も次ぎ／＼と續出する負傷者の收容
の爲に此處までは手が伸びそうもありません。
志賀隊長殿は大変天だ／＼と云はれます。
が早手足は冷たくなつて居ます。
此うしては居られぬと云ふので近くの部落
から戸板を一枚持つて来て

假繙帶折返退る事になりました
隊長は軍刀を手にからなかく離しません
「おい 皆しっかりやれ 俺は後から直ぐ
行くから」と皆を勵し乍ら急造担架に乗
られましたが 私共の男泣きに泣いての怒
訴も遂に天に通せず 二十三時四十分遂に
護國の鬼と化せられました
息を引とられる迄意識は実に明瞭でした
藤元御世詔下った 有難う 皆にも
よろしく傳へて呉れ 俺は死んでも
お前達と一緒に 南京迄は行くぞ
と ハツキリした言葉で言はれました
天皇陛下萬歳 と二度云はれましたが 最
後にとぎれて淋しい声でした
死んでも南京迄は行く と言はれた烈々た
る魂
私の頭の中から押ぐい去る事の出来な
い

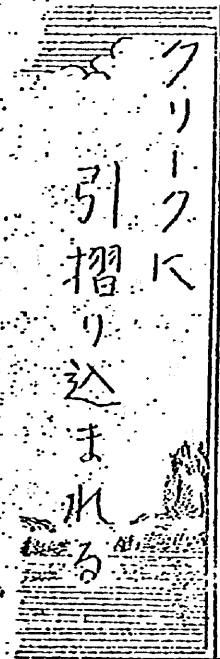
烈な 志して悲しい想出です
今は靖國の御祠に國を護らせ給ふ志賀中尉
殿の御靈に 當時の藤元は不だに元気で御
奉公申し上げて居る事を御報告申上ます

志 記 事

歩四七 四六九
歩兵伍長 泉 清治

昭和十二年十一月十日 青浦城攻患の命
を受我小隊は左第一線に攻患開始 敵の
猛射を受け乍ら前進が前進を續ける時
戦友は一人々々倒れ自分も城壁前七百米位
の所に残念にも負傷しました が激戦故
假繙帶も出来ずに居た時 前進中負傷もな
神崎衛生上等兵が自分の重傷の身もかへり
見ず假繙帶としてくれた 其の上假繙帶所

に收容され、後、何かと治療され、
した。此の時の事は、今、忘れ、争の出来な
い感慨深い思い出です。



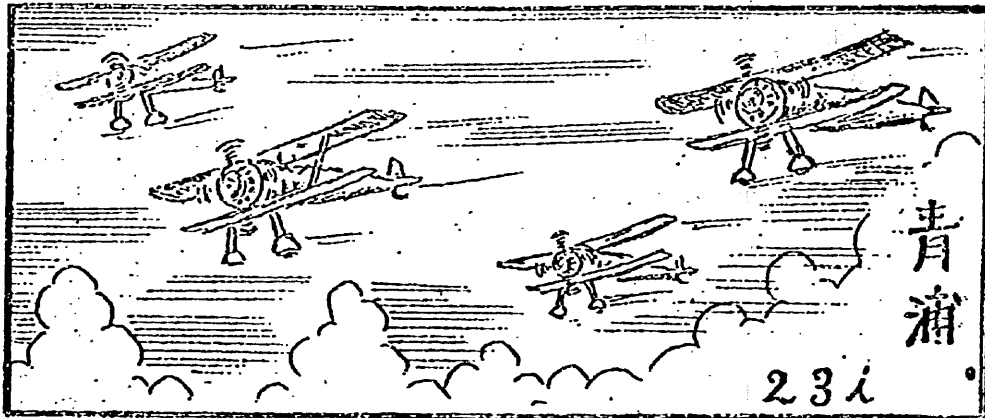
歩四七五九九

故歩兵伍長 川野 静

十一月十日青浦城攻襲の時です。今隊員
十一名は分隊長以下四名負傷一名戦死を出
し、六名に減りました。が、前面部落の陣地よ
り益んにケモウクを射つので前進不能に陥
りました。

其の時友軍の飛行機が来て爆薬を散行した
為敵は浮立ち退却を迫りました。
我等は機を失せず部落に突入したのですが

其の時自分も思ひがけないうち失敗をしまして
部落の後は幅三〇米位のクリークが有つ
た為、十四五名の敵が逃げ遅れて居て、自
分達を見ると銃を逆さまにして拜んで居る
のです。
それを戦友の仇思ひ知れとばかり五六名を
萃せしめた所、残る奴等はクリークに跳
込み逃げ様としまし、所がクリークが案外
深かつた為、アツアツとヤッてゐます。
其奴等も、ヤッ、と突いた時、
剣を握られて、自分もアツアツと引込まれ
てしまひました。
漸く戦友の銃につかまり上げてもらいまし
たが、今でも戦友と思ひ出しては苦笑して
みます。



青浦城に至ル苦戦

歩二三工ノ二

歩兵軍曹 十亀 義一

十一月九日の夜、我が隊は例の悪路をクリークに沿ひ前進してゐました。一寸先きは暗くて、而も田圃の畦傳ひを、一列縦隊で前進するので、追寄せを要したため、其の

疲労は實に大したもので、行軍中話なんがする者は一人もない。只迷ひ子にならん様、前の者にくつゝ、いて黙々と痛む足を引を摺り乍ら歩いたものでした。小休憩、飯を炊けし此所彼所で今までの静寂を破り話し聲が聞えて来る。聴て飯盒がチヤ／＼と鳴り出した。自分達も飯を炊く準備で、大忙だ。足には大きな豆が五ツも六ツも出てゐたが仕方なく、飯焚にかゝる。豚を丸焼きにする者、鶏を丸焼きにする者、行軍の疲れも夢と消し飛んで嬉しむと時です僅かの時間には却々困難です。

「前進し」

今まで疲れた体で漸くたどり着いたのです
が、飯を食ったので元氣百倍、此の分なら
朝まで、なんの事はないぞと餘裕しやくし
やくとやつて行く、然午前二時に針が廻る
頃は實にねむたくなつて來ました

此の時ばかりは仕方のないもので、如何ん
せん何時しか驗が仲よくなつて仕方がない
ねむたさの餘りよろ／＼とよろけては戦

友につき當る、又は立ち止つて後の戦友に
つき當られる事等珍らしくない、此所彼所
でドボンと跳ねる水の音、足を踏み損つて
クリークに飛び込んだのです、十一月と言

へば夜中は随分冷へる、それにクリークに
飛び込んだから愈々寒くなる一方です、自
分の前に行軍してゐた戦友が道の左側で休
んでゐる様にあるので、其の方に道を横切
つた所が、ドボン水音を鮮やかに、クリー

クに飛び込んだ、戦友が心配して「オイド
ウ」の叫びを尋ねてゐるが、此方は水の中而
も背の及ぼん所に背囊を負つた儘飛び込ん
だのだからたまらない、漸く這ひ上り、又
行軍を續ける、寒さは寒し……、夜が明け
て見ると体中クリークの浮草で見事なもの
だと、戦友に笑はれたものでした

幾日かの向敵も見當らず、丁度十一月十日
午前五時青浦城五折位りに迫つた時、クリ
ークの右側を大部隊が我々と同じ方向に行
軍してゐるのが、所々に焚いてある篝火で
解つた、旅團司令部だらうと專らの話して
前進しました

それと一諸頃クリーク上を支那の舟が十艘
ばかり自分たちの部隊と一諸に上つて行く
のが目についた、尖兵は第四中隊で中隊は
其の後を前進してゐるので、尖兵から見ると
随分後の方だったが、其の頃はもう尖兵

ではバン／＼と小銃や輕機の豆をいゝる様な音が夜の静けさを破り 聞え始めました
前進方向に於て信号弾が上り始める頃 前より遞傳が来た

「其のクリークを舟で来るのは敵だ」
「毒／＼」

次の瞬間舟に向つて 滅多毒ちにくちまくつた 一瞬間だけ残して彼等の姿は何處へやら 影も形も消失せて了ひました時は既に十一月十一日の未明青浦城二軒の地點に達してゐました

命令を待つ我等の腕は高鳴り武者振りは我等の期待に沿ふ如く我が中隊は尖兵となりました 相変らずクリーク右側の部隊も青浦城に向つて前進を續けてゐる 距離五〇〇米 既に青浦城一千米位の地點にある等は夢にも知らなかつたのです 敵と衝突の時期も刻々に迫つて来る 青浦城内警備

の敵軍も我等の来た事は豫想外だつたらしい 青浦城外三百米城外を取巻くクリーククリークの橋の上に差しかけた折りて来るので 橋の真中に於てばつたり行き會つた 大部隊とて旅團司令部と思ひの外 部隊は意外にも敵でした

「敵だ 毒／＼」

クリークを登り込んで忽ちの内に修羅の巻と化したのです 抗戦數十分にして敵は退却しました

城壁を乗り取ればが雲崩れ途まんとしたかそれと同時に城内の敵も日本軍来たりと知り城壁より盛んに十字火を浴びせ 茲に青浦城陥落に至る迄の大激戦が展開したのざあります 先づ敵の機先を制して城へ城へ押し寄せ 中隊長殿以下凡そ三十名は城門の扉を破つて城内に突き入らんとしま

したが時既に遅く 早や城内には支那
頑強に陣地をと領し 自分達の城内突、
阻止しました 此の儘に前進 未だ徒らに
犠牲者を出すばかりなので 城門の中に一か
たまりにたつて入ってゐると城壁上より姿
を隠して居て手榴弾だけが宙に躍つたと思
つた瞬間 轟然たる爆音が耳をつんざく如
く私達の足元でしました 丁度傍に居た
戦友が重なり合つて倒れた 後で考へて見
ると實際進み過ぎた様にも思はれます
城内の中に這入つたなりで出るには出られ
ず 前には行かれず 残念此の上なく 手
榴弾は遠慮會釈もなく投げられ 戦友は瞬
く間に相次いで倒れ 切齒扼腕するのであ
りました その折の戦斗では砲と名の附も
のはなく心細く感ぜずには居られなかつた
併し我等に光の射す折が来た
上空高く爆音も勇ましく飛來たつた友軍機

敵機は陸部隊に對應して、城内の要所
に、雨を降らし 陸部隊の志氣を破が
上にも鼓舞するに充分でした
城門に迫つた三十名は僅かに敵前二十米を
距て、惨たる肉弾戦を交へて一日過し 夜
に入つた 相変らず彼我の銃砲聲は間断な
く續けられた
丁度九時頃敵側にて懐中電燈が ぱか
あかり出したと思つた瞬間 僅かに我等が
身を隠してゐる家に火がつけられたのだ折
からの強風に煽られて炎は天にも届くかと
思へる位燃え出して我々の遮敵物はもろく
も一瞬にして灰燼に歸し一時後方陣地に身
を置かねば已むを得なくなりました
中隊長殿以下自分達の胸中は残念で
煮え返る様でした 神の加護とも言ふか逆
風に敵が焚いた火は遠慮會釈なく敵に向つ
て燃え上りました 面食つた敵は城壁の上

で狼狽したものと察せられます。其の後自分
は右大腿部に銃創を受け一線を下りま
だ

機先を制して

歩二 三 工 ノ 二

歩兵上等兵 川野勝

十一月九日夕刻 僅かの時間にて飯盒炊事
をして連日の急追毒の疲れも見せず朗らか
に手柄話等をし乍ら

さもおいしそうに夕食を済まして居ると

旅團本部が通り掛り 時の旅團長牛島小將
閣下が兵隊の前に差しかゝられると自から
敬禮をなされて

「御苦勞ノ〜」

と言はれました。右手には杖を持たれ、あ
のお齡で、あの泥濘を兵隊と同様に行軍さ

れらのに少しの汚穢の色も見せず、さ
らに

「おいしそうな御馳走が出来たでは無
いか」

と豚の丸焼したのを食ふて居る自分達にさ
も親しく話し掛けられるのでした

有難くて涙が出そうでした。其の後はアゴ
を出して居る戦友を見ると

「何か貴様は若いくせに、あの旅團長閣下
を見よし」

と誰もが言ふのでした

其の夜は夜通しの急追毒、翌朝夜が明け渡
る約三時間位前から狭い所で七八十米廣い
所で二三百米位のクリークを挟んで向ふ岸
でも部隊が先頭を我等と並べて前進してゐ
ました。向ふ岸も友軍が前進するものとは
かり思つて前進する事、約三時間ばかり
夜はほの〜と明け渡る頃、其のクリーク

に橋のある所まで来ました

中隊の人事係紺家准尉殿が 敵か味方が確
かめて来ると軍刀をひつさげて橋の中間ま
で行かれた時 敵の先頭とばったり橋上で
會つた 准尉殿は向岸の敵が射てとの号令
と共に一人二人切つて捨てられた 其の号
令が准尉殿の口から出ると 同時に友軍は
クリークの岸に伏せて一斉射撃を開始しま
した

機先を制せられた敵は伏せる間も無い 友
軍の打ち出す弾丸は寸分も違はない 敵は
見る間に死体の山を築く 白頭教はった
機先を制せよと言ふ事がいかに重大である
か此の時始めて 我々の頭にピンと来
ました

若しこれが反対であつたならば あの敵の
憂き目を我々が見なければならなかつたで
せう

青浦城攻毒直前こんな痛快な事もあつて
十一月十一日 青浦城は難なく占領出来た
たのであります

青浦城外 立橋上の奮戦

歩二三 エノニ

歩兵准尉 紺家 政男
杭州湾上陸以來敵は我が軍に背後を衛かれ
て上海戦線總崩壊と成ました 南京蘇州の
線に退却を始めましたので 師團は獨得の
戦術健脚にまかせて猛追毒戦を開始しまし
た

私達は初め後方戦線にありましたが 次第
に戦線が展開して 中間で一役を命ぜられ
て金山を過ぎて青浦に追毒致しました

十一月九日夜はクリーク傳ひの本陣道を
夜通し行軍して皆非常に疲れておりました
それに朝霧のために見透がつかまへないので
敵か味方かクリークを隔て、約二〇〇名
位の兵が進行してゐます

敵だ、旅團だ、と言ひ合ひましたが何
う見ても日本の兵隊にしては擔ひ棒が多
い、つゞきり敵だと判断を下しました、駒
澤大隊長殿に報告しましたが、はつきり分
らない、皆半信半疑でありました、然し
次の瞬間、あたりの霧が漸く晴れ渡つて
「それ敵だ」

と皆が叫びましたので、大隊長殿は

「紐家の判断通りだった」

第二中隊は速かに部落の前端をと領せよ

と命ぜられましたので、私は大急ぎで中隊

長殿に報告して、尖兵長でありました長友

准尉に命令を傳へんとして、部落の立橋に

来た時支那人が飯をザルに入れて擔いでる
ます

兵は疲れて朝霧のため、ボート、としてあ
たのか敵は不意をやられて、なす事を知ら
なかつたのか

或る兵隊は「你々」と呼びかけたのもあり
ました

そこへ私が追ひ付きましたので、見ると鉄
帽に巻脚絆です

「何をばや／＼してゐるか、敵だ突け／＼」

と叫びました、兵隊は「ハッ」と氣付き

着剣もせず突いたのもありません

敵は昨夜部落に宿營したものと見え、あ

ちら、こちらに数名宛死受けられ、朝の空

腹も疲れも忘れて格闘戦が行はれました

私は立橋を越えて、松江、崑山に通ずる本

道を逃げる敵中に、先頭に居た兵四、五を指

指揮して突入し、手當り次第に叩き斬る、又

は偵察して直に数十名の敵を斃しました
主力は中隊長殿が指揮されて青浦城南門に
突入されました 敵は狼狽して片端から銃
剣の錆になりましたか 此の物音に城内の
敵が城壁上に出て瞰射 又手榴弾を投下し
て 中隊長の長友准尉を初め数を傷つきました
た 折角南門第一門を占領しましたもの、
城壁上より敵に應戦不利と見て 約二、三〇
米後方に退り部落を占領し攻車を續行致し
ました
私は立橋上へ引返して軽機関銃を指揮して
同橋を確保して 上海 松江より退して來
る敵を待ちました
敵約二〇〇名が後隊と成つて二〇〇米近く
橋梁に迫りましたので一斉射撃を命じまし
た
見る／＼敵は倒れて行きます 此の機逸す

べからずと見て突進を實施すべく考慮中
城壁上より及南方部落から三か火を集中され
て一時は頭も上げられず 敵の射撃下に
身を委ねてゐました その時部下が二人倒
れました 無念と思ひ乍らも致し可く
彼等を安全地帯に抱き入れました 敵は五
〇〇名 八〇〇名と退却するのを見ました
私は大隊長殿に敵状を逐一報告すると共
に是非機関銃一銃下さりと要求して直ちに
一銃 糾察の指揮に入れて下さいました
追及して來ました機関銃が立橋に上らうと
しますと城壁上よりの瞰射のため前進が出
來ません
私は一〇〇〇名に迫り敵を見て気が氣でな
く瞰射を犯して前進する様に命令しました
敵の弾丸に恐るゝ何の戦斗が出来るか勝
利を得る事が出来るか上つて來りし

と叫びました。それに勇氣を得て、私の處に來ました。上中二米の立橋上に輕機重機二銃を据へて、効力距離内に入るや射毒開始を命じました。敵はバタ／＼と倒れ支離滅裂となり東北方に潰走し始めましたのでその密集部隊目かけて猛火を浴びせかけました。敵も味方を撃たれろのをかまはず、城壁上から猛火を浴びせしましたが、今はその弾丸も耳に入らず、敵の退路遮断に免れました。

そして機を見てはそつと城壁上の敵に重機を向けて掃射を行ひ沈黙せしめ敵を悩まして中隊主力の攻毒を掩護しました。

立橋で敵の退路を遮断する事十餘時間でありました。あの時立てた日章旗には敵弾十數發の弾痕を残してのます。本當にあの時ばかりは、死も生も忘れて痛快でありました。

今に考へて見ますと、我ながら良く奮闘したものと思ひます。部下を失ひ感慨無量な中にも數千の敵の退路を断ち數百に余る敵の斃れたのを見て部下に申訳もあると一人が哀悼の意を表すると共に部下の冥福を祈りました。

重傷を負へど 更に進毒

歩二三本部

歩兵上等兵

松山 喜佐雄

銃砲聲は毎日／＼般々として轟てゐます。暮れ易き十一月の太陽も早落ち、月無き宵闇の中をクリークに沿って進毒を續けた我等一同は全く綿の様に疲れてゐました。東の空がほの／＼と明け初めると再び元氣百倍流の健脚部隊です。

「アツ見えた」兵の指差す前方朝霧
の中に浮繪の如くラマ塔が冲天高く見えま
す。此れが待望の青浦城です。我等一同余
の嬉しさに今迄の疲も何時の間にか忘れて
しまひました。

朝霧も晴れて四辺は廣く田であります
霧の合間より城壁も微かに浮いて見
へます。

クリークに沿った田圃道は支那大軍の敗戦
を物語るが如く支那兵の携行兵器が田やク
リークに一杯散乱して居ります。クリーク
には人影も無き民船が二三隻自由に流れて
船には軍用品が一杯積込んであります。

我が軍の猛進事に恐れて退却したのでイセダ
霧も薄らぎ城壁へ刻々と肉迫します。五百
の百迫るや突然朝の静けさも破つて
ダダダ……銃聲敵弾はクリークに水煙を
立て、落ち初めました。

敵は追番隊の我等を知ったのか一斉射撃を
始め敵弾は益々激しく身邊に土煙を立てま
す。

附近には遮蔽物は何一つ無。只大地に伏し
て銃機の猛射を受けらるばかりです。

敵は益々活氣を呈し我に乱射乱轟を加へま
す。兵は田の畦を利用して匍匐前進します。

分隊長「第一分隊前方の堆上まで前進し
凜然たる号令に二人二人と前進しまし

た。「三島行かうし」よし行かばと脱鬼の
如く駆出した二人に敵は一斉に機銃の猛射
を浴せかけました。

突然耳も破れそとな銃聲にハツと思つた瞬
間です。三島一等兵が軽機を擔いだ儘フラ
くと倒れました。

「三島どうしたし」
再び起き上り。口から血を吐きながら突進
して来ます。敵弾は向激しく二人の身邊に

飛んで来ます

「三島やられたか」 「大丈夫か」

「何の大丈夫だ」

三島一等兵は激しい咳をする咳する度に血を吐く 私は三島一等兵から軽機を取って

三島一等兵と腕を組んで前進しました

「三島大丈夫か」

頑張れと励ますもの、左胸部貫通銃創

只精神力で敵弾雨飛する中を我を忘れて無我夢中で進みます

「義は山嶽よりも重く、死は鴻毛よりも軽し」

飽達も軍人の本分を盡さんとする 精神力

こそ實に軍人の龜鑑でありませう

私は三島一等兵の執討と思ひ 三島の愛銃

で敵大軍に猛射を浴びせました

午後になつて空軍の協力下に敵を大破し翌

十一日拂曉青浦城を完全に占領する事不出

来ました

アノ時バカリハ

無我無中

歩ニ三エノニ

歩兵准尉 紺家政男

青浦城南門に中隊主力が突入しまして第一

門は何なく占領致しましたが 第二門は敵

が扉を閉めて不意を食つた敵は城壁より手

榴弾を投下して又狙毒し南門をやらじと抵

抗しましたのでその爲に数名傷をまました

此の分ならまだ損害を被り不利と見られた

中隊長は折角占領した南門第一門を捨られ

て三十米後方の部落实を占領する如く命ぜら

れました 退く事を知らぬ中隊ではありま

したか涙を飲んで後退しました

其の後退しました家屋は城壁下より續きの

家でありまして 敵は城壁より私達の影で
も発見しましたらうがきに一発又発と手榴弾
を見舞ひますので出るに出不れず苦戦しま
した

予備隊はクリーク一つ隔てゐますが、むし
ろ袋の中に半分飛込だ形です 大隊主力の
攻勢進展に伴つて攻勢しなれば徹射及三
方火で如何んともし難く夜の入るのを待ち
ました 決死隊を送れば必ず占領されると
確信された中隊長も 今多くを死なせ傷け
ては南京迄の攻勢に戦ふ兵力を思へばと苦
惱の色が現れて居ました 大隊主力の方面
は逐次進展して遂に夕方を迎へました歩兵
第四十七聯隊の進出も見えて中隊は夜襲の計
畫成り其の準備を急いでゐました處 四十
七聯隊の方にて小部落を焼却すべく火を放
ちましたので それにヒントを得てか敵は
城壁下に待陣して居る私達の家屋に石油を

かけて投火しましたので城壁下の方から火

ました

これでは大変萬事は休す生死を天に委せ
時クリーク後方の部落に後退を命ぜらまし
た 再び後退の命令中隊長殿の心境察する
に余り有るものがありません

負傷者をかゝえて集中火を受けつゝ立橋を
渡らなければなりません 私はその處で予備
隊に全火力を城壁上に集中する必要ありと
氣付いて刀を握るや否や逸散に立橋を渡り
予備隊の位置に駆け

「オーイ皆ツククリーの處に出て城壁上の
敵を狙撃せよ」と絶叫しました

予備隊に連絡するや大隊長に報告すべく駐
道で夢中で飛びました

何處をどう駆け行ったか 又大隊長殿に
何を言つて報告したか 今だにそれはわか
りません 大隊長殿より大丈夫かと問はれ

「ハイ、大失夫でありますし」

と答へて、又夢中に駈けて中隊に帰りまし
た時は予備隊の掩護により無事立橋を渡り
予備隊の位置に引揚て居ました。何と言ひ
ましても戦争と火事騒ぎで總てが無我夢中
でありました。それにつけても終生忘る、
事が出来な事があります。

この苦戦と火事騒に戦死した兵を一人火事
場の位置に残してしまひました。然るに運
ばんとして出れば敵の集中火のために又遠
敵物全くなき。余りにも惨酷です。屍を敵
と味方の中に置かなければなりません。で
した。

中隊長殿はあの屍を敵に奪はれたら日本軍
の恥だ。皆あの屍を守つてくれ。敵に渡し
てくれるな。と血涙と共に屍の事を氣遣はれ
て居られました。そして

「溝口の不覚だつた。敵前に部下の屍を曝
すとはなんたる事だ。相済ないし」

と語られました。私も何とも答へる言葉も
なく、敵が若し奪ひに来たら、中隊全員が
決死奪取。南門を占領してこの頑敵に一大
鐵槌を與へませうと二人は屍を見守りまし
た。中隊長殿は

「済まない」
と繰返されます。居ながら兵隊はこの温愛
に接して皆泣きました。天祐か風は南風と
なつて城壁上の敵は自業自得火にあふられ
て城壁を下りました。

その為屍は敵に奪はれずして済みました。
此の風は私達は神風だと云ひました。又溝口
中隊長のあの温愛に神が與へた風だつたと
皆話し合ひ無事なるを喜びました。
暫くして茶毘に附して尊き靈に對して哀悼
の涙を捧げました。

痛快だった 友軍機の爆轟

歩二三 エノ二

歩兵准尉 紺家政男

十二年十一月十日青浦城南側立橋を占領しました。我が中隊は上海松江より退却する敵数千の退路を十余時間に亘り遮断しました。その時飛行機の爆音を聞いて二時之はでつきり、敵機中参り、退却收容かとい寸心配して見ましたが、見れば「日の丸」や「あ友軍機だ、友軍機だ」と私は立橋上に雀躍りして喜びました。そして手にしてゐた日の丸を左右に振って、標示幕を田圃に敷かせて、尚も日の丸を振つてゐますと、城壁上から「バラ／＼と敵射を受けました。

塩月一等兵が破片の爲に耳を負傷しましたが元氣なもので最後迄協力して射撃を續けてゐます。

飛行機は敵敵の密集部隊を見付せか、直下し舞上つた刹那、グワ／＼と敵の散乱する様が見える様です。私は立橋上に立ち上り思はず、萬歳を絶叫しました。

敵敵を見付けて、三機は活躍し青浦城上空に近かつくと見るや、一弾、二弾、三弾……

グワ／＼ 天地も揺がし、立橋が崩れ落ちんばかりの大爆音。

瓦飛び、木飛び、城壁上の敵も度膽を抜かれてしまひました。

敵敵射の中に身の危険も忘れて立橋に立ち上り萬歳を絶叫しました。實に痛快でありました。





23人

でま近附山崑

目次

噓のやうな話 歩二三ノ五
 吉田(秀)軍曹

想ひ出 三題 二二三 エノ一

死んだ筈の敵が 歩二三 田本部
 二度反毒 歩軍曹 木上重信

蘇州河の 二二三 エノ一
 一番乗り 歩准尉 酒井

鍋墨の姑娘 二二三 本部
 歩上等兵 河野明

崑山で 二二三 エノ所
 中隊に追及して毒 歩上等兵 後藤利市

平望鎮支隊 歩二三ノ十一

嘘のやうな話



歩三三ノ五 吉田(秀)軍曹

快速部隊たる第六師團の猛進裏に 敵は退却し切れず 友軍の前進と入り乱れて退却する状態でありました

某團の天文台である余山鎮山麓に夕暮近く到着し特等古舞で夕食を済し 望明りを唯一の頼りとして手探りで朝食の準備をしてみると出發準備が下りました

直に行軍序列を作り出發号令と共に青浦城に向ひ約三四十米前進した時 知ってか

知らずでか 又は暗黒の爲友軍と間違へたものか 五名の敵兵が突然隊伍に無理に割り込み 背囊を肩はず小銃だけもって行軍をしてゐるものだから 後の兵隊が氣付き「コラーア」背囊も肩はず今頃ホウトして

隊伍に入るのは誰かし

と云つて背を突くと急に問題の兵隊があわて出し隊伍を離れて逃げ始めんとしたので

漸く敵と判断し 早速擁護にしました

まるで一時は蜂の巣をついた騒ぎでまるで

狐につま、れた様な感じが致しました

敵も退却の混雑に友軍と誤認したのでせう

其証據には二百も歩かずに中に退却する

敵と衝突し 交戦する状態であつたのです

から 此の様な事はまるで嘘の様であり

二度となく聖戦中最初であり又最後であらうと思つて居ります

想ひ出

三題



二三 エロー

甲斐軍曹

「中文にはクリークといふものがあつて皇

軍の進退が阻まれようとしたと聞いておりました

一体クリークとはどんなものだらう。落ちたら大変だと警戒して行ったら、豈圖らんや。小さい溝だったので意外だと思いません

山田軍曹

上陸後は泥濘に加へて物資が乏しく、毎日く／＼の急進軍に参った。岩塩の事で副食物なしに食った事もありました。白鶴港鎮で、敵の逃げた舟を探してみると砂糖が八俵ありました。これはいゝものを探したぞと、一ヶ分隊に二俵宛分け、小豆を探して毎日ゼンザイの御馳走でしたが、あれで大層元氣を回復した様でありました

甲斐軍曹

白鶴港鎮で自動車百台位、砲三〇門位鹵獲して、中隊長殿が忙しそうに皆に礼を付けておられました。嬉しそうです。蘇州河の橋を焼却したので立往生したらしいです

死んだ筈の敵が之度反撃

歩二三一 師本部

歩兵軍曹 木上重信

時は昭和十二年十一月十二日、南京攻勢一ヶ月前、崑山へ向ふ途中蘇州運河を我等は前の第二大隊池田大隊に配属となり、猛追中、敵は逃げ場無職激的打垂を與へられ、早日も暮れんとする頃、我等は舟を綱で引張りながら前進しました。クリーク沿岸の

0312

敵掩蓋銃座には必ず四、五名の敵死体があり
ました

我々は一人でも生じてをいてはならぬと

舟を引張りながら皆ゴボ剣で突殺し前進し

ました 處が或る銃座には水冷式重機関銃

の上等存のを発見しました 私は早速林軍

曹に救へて掩蓋座に這入って見ると此處に

も四名の敵死体があります それをゴロコ

口轉かし敵の重機を引出して 退却する敵

にこの機関銃で猛射を浴せました

その後三の分とたぬ時命令受領者が露營

の命を持って來ました 早速兵は炊事に忙

かしい

炊事中の兵が飯盒を以て銃座附近を通ると

今迄死んでゐたはずの敵が頭を上げて小

銃を振り向けたといつて顔色を変へて逃げ

て來ました

その附近一帯が友軍の露營地で四方八方炊

事をしてみますので 射垂をする訳にも
参りません

その時通りかゝつた小銃の兵隊が背囊の横

に一決して發煙筒を持つてゐます 早速相談

銃眼に投入しました すると支那兵は發煙

筒を踏みにじつて仕舞ひました これは失

敗です

それを見てゐられた第二大隊機関銃隊長殿

橋口大尉殿が皆円匙を持つて來いと命ぜ

られました

何をやるのかと思議に見てゐると その

銃座を土で埋めよとの命令です 兵は抜き

足で近寄つて行きます

ニツ三ツと土をねるが早いのか 中の敵が

銃口を出して一發射ちました 幸に負傷者

はありませんでした（失う）が失うし

今度は金田大尉殿が

「ほつとけ」

と言はれましたので皆夜の準備にかゝりま
した 間もなくすると

「逃げた」

といふ聲がします

薄暮で人の姿も容易に分りませんが、とう

く逃げてしまつたのです

以前機関銃を取る時 支那銃が一銃あつた

のをその儘にして置いたのが悪かつたので

す 敵も最後と思へばこそ頑張つたのでせう

天晴な奴でした

蘇州河の一番乗り

二二二工ノ一

歩兵准尉 酒井

調所隊櫻木隊は尖兵として白鶴港鎮を出發

致しました 蘇州河岸迄進みましたが 敵

が我が進軍を阻む爲 橋梁を焼失して居る

ので渡河が出来ません 對岸には堅固な陣

地を構築して迎へ毒たんとしてゐます

部隊は一齊に河の線迄進出 歩四十七も河

下の方に出て居ます 舟はなし 探すにも

大きな姿勢をするとすぐ狙撃されるし

中隊長殿が

「舟を持って来た者は必ず金鵝勲章だ」

と言はれる程でした 只敵方を睨んでゐる

中 一つの間に山野軍曹が舟を引張つて

来ました

則せよして挙る歓聲

それと同時に櫻木軍曹の率ゐる一隊分隊と

熊本軍曹は 弾が飛んだ様に飛び出して

舟に乗り込み敵に向つて滑ぎ出した

我々は此の一瞬の出来事に暫し呆然として

援護射撃をへ忘れてゐる状態です

敵陣からは手エツク小銃の集中射撃 月の
近くに水煙を上げて落ちる

弾丸の中をどん／＼進み行く力強き 頼母
しと

勇士等は銃剣を持って飛下りた 櫻木軍曹
の軍刀が閃く 散開して敵陣に突入 虚を

衝かれた敵兵を當るを幸ひに 切る 突く
鬼神の奮 其の勇敢な姿に今送頭を下げ

て剣喜して居た友軍も 立ち上つて歡聲を
上げてゐる 中隊長殿も大地を踏んで

「そら 今少しだ やれし
と激勵して居られる その興奮の一瞬

「よし櫻木隊を見殺しにするな 遅れお進
めし

の号令も待たばこそ 勇氣満々たる我々も
一斉に渡河 見事蘇州河一番乗りをやつた

のであります
奇蹟的にも彼等勇士は微傷だに負つてゐま

んでした 山野軍曹は二三名の兵を連れ
て川上に行き對岸にあつた舟をこつり奪
つて来たもので 誰も氣附かなかつたので
す (山野軍曹は南京城攻略戦死)

鍋墨の姑娘

二ニ本部

歩上等兵 河野明

蘇州河を渡つて間もない時のことでありま
す

道無き所を部隊はクリーク傳ひに前進を續
けました

とある部落に這入り込んだ時 道端の半壊
の家屋からブーンと焼酎の香りがします

永いこと飢えに／＼たアルコールの懐かし
い香りです

家に這入って見ました

激戦の跡です。人の居よう苦もありません

土間を通り抜けました。人が居ます。ビ

ツクリ致しました。六十位のお婆さんが丸

い竹製の火鉢を膝の上に抱いてウン／＼呻

って居るのです

その脇には年頃は判りませんが、色の真黒

いキタナらしい女が震へて居るではありません

ませんか

胸のどろろ気がやっと静まりましたので、解

りもしない支那語で

「酒有没有我賣買し

とやります」と、何んと思つたものか、

彼の女はキヤツと奇聲を登して裏口へ駆け

出し、道路を飛び越えて、前のクリークに飛

び込みました

此方は二度ビツクリです

幸ひクリークは浅かったので死ぬ心配はあ

りませんでした

皆んなが、何うした／＼と救ひ上げて家に

入れてやったのです。が、濡鼠になつてクリ

ークから上げられた女の顔から黒い鍋墨が

とけて行くのです

泣友から顔を拭く女の顔は白く美しくなつ

て行くのです

たしかに、一七八の娼娘に変わつて行くのでし

た。いや、私は二度ビツクリ致しました

そして吹き出してしまひました

山崑山で中隊に

追及して喜ぶ

二二二 工ノ海

歩上等兵、後藤 勝利市

十一月十一日抗州湾に上陸して、泥濘の中

支に第一歩を踏んだ私達駄馬部隊は故兒島
中尉殿の指揮下に十二日松江に向ひ前進し
ました

上陸してからの苦勞混雜の様は到底舌筆に
現す事は出来ません

道路は目に見える全てのものが馬馬馬
馬の大進軍でありました

それでも十三日無事松江に着く事が出来ま
した それから青浦から崑山へ 敵の屍を
踏み越え

十六日 崑山でありました 一線も余り遠
くないのが ピューンと高く敵弾が飛んで
来ます

此處で私達は部隊を待つ事になつて十六日
十七日の兩日露營しました 十八日午前

中部隊が崑山に引返す事を知りました 永
い間中隊の人達を見ないので急に戦友の事
が氣に在りました

血と汗によつて占領せられた所を辿つて来
た私達には戦斗部隊の奮戦の様が十二分に
察せられました まして重い機関銃を分解
搬送してゐる戦友達です

中隊長殿は元氣だらうか 黒木は日高は生
きて居るだらうか 等々 氣遣ひ乍ら部隊
の到着するのを待つて居りました

間もなく部隊が到着し元氣な戦友の顔を見
る事が出来て私は只嬉しかった と共に後
から進んで来ただけに戦友に相済まない氣
持で一杯でありました

私は戦友の肩の破れを眺め乍ら道路さへ良
かつたならば……馬に逢ひ度かつたであら
うと戦友の苦勞を思ひました
馬を見て或る分隊長は鬣を撫で乍ら馬に何
か話して居られる 一弾薬箱は重い弾薬箱
を 背負袋を下しもしないで馬草を與へな
がら目に涙をさへ溜めて居りました 馬も

嬉しのであらう足踏しながらヂツとして
居ませんでした

其處此處にこんな情景を見せられて私は馬
に付いて、その時まで感じてゐたより以上
の何かを感じせしめられました

平望鎮支隊

歩二三一 十一中隊

昭和十二年十一月十四日午前一時二十分

平望鎮支隊は其の先頭を以つて平望鎮北方

約千米の地奥に差懸りました

すると突然陸上より敵の猛射を受けました

ので、支隊はその位置に停止しました

中隊へ第一小隊第二小隊の第四五分隊欠

は大隊の平望鎮上陸掩護の命を受けました
ので、直ちに鐵橋及本道橋梁附近に敵前上

陸を敢行する事になりました

敵の射害に應ずる事なく、先づ第二(竹井)

小隊を鐵橋東方約一五〇米の地点に上陸さ

せ、掩護をなせしめましたが、クリークが

あつて前進困難です、そこで第三(米良)

小隊を直に要圖の鐵橋及橋梁の位置に敢然

上陸して第三小隊右第一線として鐵道線

路上の敵を攻惠させました

第二小隊も引續いて同所に上陸左第一線と

なつて本道上の敵を攻惠、特設第一小隊は

後方警戒の爲め鐵橋及橋梁の線に位置せし

めました

第二第三小隊は約三百の敵を喜退して鐵橋

より約八百米の地点に進出して居ます、第

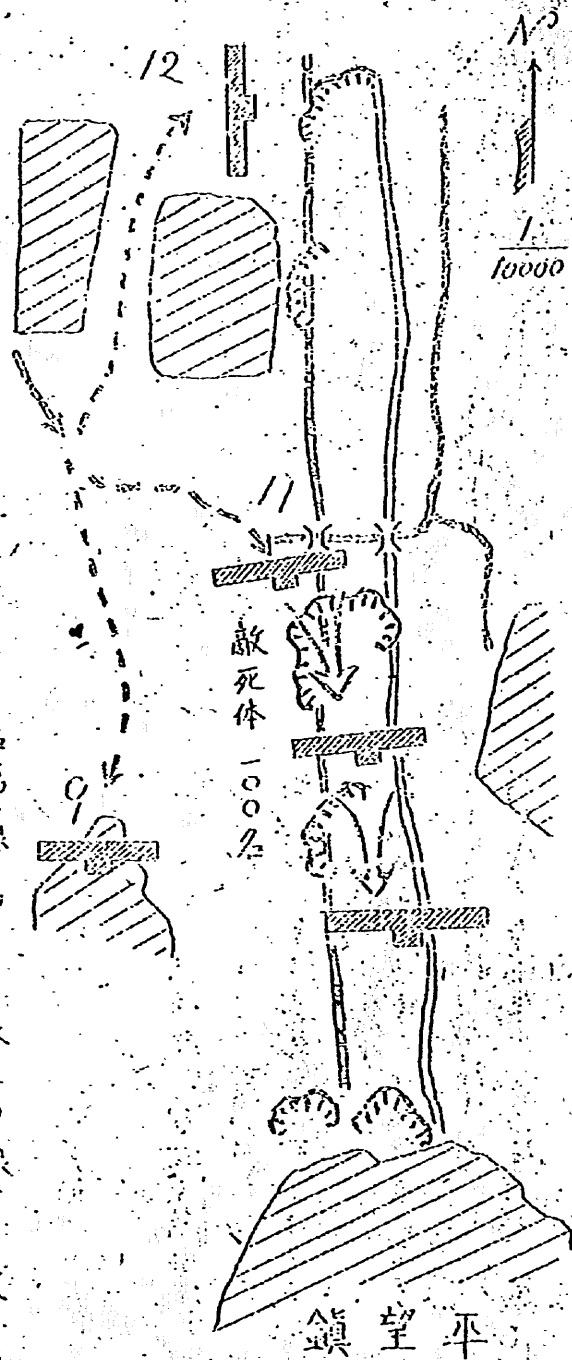
一小隊は後方より来る敗殘兵を逐次橋梁附

近に殲滅しました

斯くして命に依り中隊は同地を確保しつ、

天明を待つ事になりました

平望鎮上陸當初の態勢



午前六時 第三小隊の正面に敵兵が一名紛れ込
込がました。が誰何されて驚いて圖囊を投げ
つけて逃走しようとする所を高橋正一等兵
が刺殺しました。之は敵の指揮官で少佐
でありました。

翌午前七時三十分 大隊砲及山砲の射喜が一
斉に開始され、八時より第十一中隊(補属)

敵死体 100名

平望鎮

右第一線 第十二中隊左第一線となり攻喜前進
いたしました。 第二小隊は本道上を平望鎮
南端橋梁に進出して、同所に於て五隻の發
動艇に滿乘して逃走しようとする敵を発見
配属機関銃隊は、好餌とばかり之に銃射を
浴せて殲滅いたしました。
斯くて午前八時三十分平望鎮は完全に占領
平望鎮駅を確保し、別命を待ちました。



崑山附近

47

白鶴港鎮に突入

歩 四七、一

歩兵止等兵

東恩納應啓

昭和十二年十一月十一日未明 無名部隊を
 出發し前進す我第一中隊は 敵敵を駆逐
 しつゝ午後六時頃白鶴港鎮に突入いたしま
 した

敵は此處に堅固なる陣地を構築し 我が前
 進を拒もうとして居りますので 中隊は夜
 間配置に着き翌未明を期して一氣に攻撃す
 ることになりました

我林野分隊は連日の強行軍に全員疲労の極
 に達して居りますものゝ 敵を見れば別人
 の様に気負ひ立ち 士氣旺盛であります

所定の位置に配備はけり、敵の射撃は愈々急で迫来砲弾が所々にホカクンと炸裂します

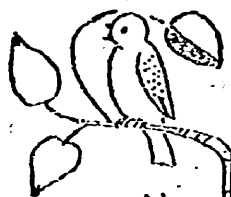
こうした中に我分隊は大地に伏したも、陣地を構築しました。一尺二尺と壕が深くなるにつけて空も腹はかう／＼うなり出します。考へて見れば今朝お登前に飯を食った丈で、何もまだ食つてゐません。時計は既に二二〇のを示してゐます。

壕を掘り下り食へと乾パンが渡されました。その美味いこと、壕掘の苦しさと共に忘れられたい想出です。而もその乾パンは所謂「将分石給與」で敵のパンだつたさうです。

敵の子エツコは一晩中火を吹いて我々をまんじりともさせません。然し私共はかわるがわる假眠して明日の攻業に備へました。稀曉と共に攻業です。夜中までかゝつた壕

さう然して前の方の線は突進すれば敵は最早逃げ腰です。一気に平坦地を突き抜ければ早蘇州河は眼前に横たはつてゐます。

此の戦いで私は最も親しく、死守は諸共と誓ひ合つた吉野上軍兵を失ひました。戦友の遺骨を掘りて生前の約束を果さうと蘇州崑山へと帰郷で猛進しましたが不幸その約束を果すことが出来ませんでした。



銃剣を刺されたまゝ、逃げて行く敵兵

歩四七、四 田中軍曹

蘇州河の音前で吾々の分隊は師團直轄となり前進しました。途中白鶴港鎮はさかんに

に燃えてゐました

分隊は前途路上の部幕を掃蕩せよとの命によりまして、一々部幕の家を掃蕩して行く

中、私は玉木上等兵と或大きな家を開けて

見ると土間に穴を開けて蓋をしてあるのに

気がつきました

此奴はあやしいと蓋を蹴上げてみると案の

定奥の方に次山支那人が入つてゐます

「殺しはせぬから皆出て来い」と言つても

却々上つて来ませぬ、上つて来なければ

射つぞ」と射つまゝおまするとさうく出

て参りました

先若男女皆上民達です、怪しいこともあり

ませぬので

よし此処に遠入つて居れ、心配すること

は無いし

とやさしく言つてやりすと、皆

謝々

と遠入つて行きます、ところがその中から

一人私共を突き倒す様にして脱兎の如くと

な出した男が居ます

ハツとした時後に居た玉木上等兵が、さう

と追ひかけざまに突き刺しました

どうしたのか銃剣が銃から抜けてしまつ

た、然し銃剣はしつかり敗残兵の背に突き

さ、つてゐるので、鞆いさうになり、さう

走つて逃げて行くのを私達は呆氣にとら

て、素つことも忘れて見と居りました

女子供や上民達と氣を許して油断したから

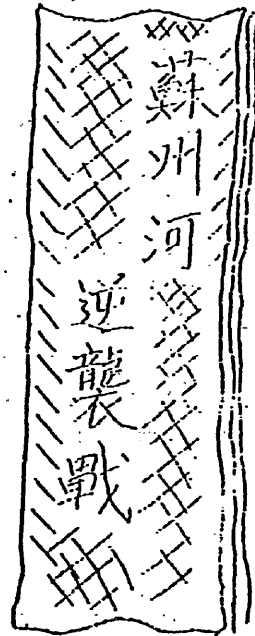
思つたのです

この位の失敗だったから良かった様なもの

、部幕掃蕩は余程氣をつけめと危いと

その時つゞく感がありました





歩四七ノ六

中村 肇曾

蘇州河にさしかかり、河の近くに來てア方
になり、部隊の角を曲つて行きますと、待
機してゐた迫撃砲の集中射撃を受け、戦友
が二人ひつくり返りました。見ると全身に
破片を受け一言も口をさくことも出来ず戦
死してしまひました。

歯ざしりして口惜しかり、直ぐ竹藪の向小
側に銃機を渡し、敵と睨み合はつ、壕を掘
りました。

潜くしますと、分隊長集合と傳令が言つ

て來ました行つて見ますと、小隊は特別任務
を受け前進する中村は分隊長率いて小隊前
方の地形偵察と云はれました。

自分は銃砲声の上み静かになつた周囲に気
を配りつ、七名の部下と共に歩き始めま
した。ところが石許りの道なものですから
始終チヤリ／＼と音がします。気が気で
はありませんでした。

暫く行つていいますと闇夜に何かうごくもの
があります。よくすかして見ますと支那馬
が一頭鞍を置いたまゝ、置いてけぼりま喰
つてゐるのでした。

漸くして蘇州河の線に到着しました。渡河
は明拂曉です。自分の分隊は墓地の所に警
戒に出さぬを命じました。陣地を構築しやうとし
ました。器具が少いのです。心細い思を
して交代して陣地を掘りました。

果せるかな敵は月が落ちたのと同時、二時

頃突垂して参りました

好き敵御座んなれと許りさかんに射を始めました。すかさず擲彈筒は照明彈を上げる

榴彈は射つて大奮闘しますので敵は退却し始めました。皆射的を撃つ杯を氣持で、

ピエつて眺めて射つたものです

最後に將校マントを着た奴が逃げて行きます

すへソレ射つと射りましたが當りません

惜しいことをしました。さすがは將校だと

と皆が賞讃したものです

彈雨下舟を奮つて帰る

歩四七ノ七 歩兵軍曹 永田辰男

時は昭和十二年十一月十二日の朝八時頃蘇

川河戦斗の跡であります

曉を街いて氣無微か爆音も響ましく我々の

前方百米の激掩蓋銃座に對地攻撃爆薬を

敢行すれば機を逸せず我々地上部隊も攻

撃を開始しました

だが百米の河を前にして地の利を得た敵は

象をかたのんで頑強に抵抗します。勿論舟は

向岸に着けてあつて渡す術がありません

この時でした。我左翼部隊より二名裸にな

つて敵弾をおかして河に飛込んだ者があり

ました。と見ると間に板手を切つて敵岸の方

に泳いで行きます

(舟をとりに行くのだな)

と思ひました。この彈雨中却々の豪膽さ

です。自分達は固唾をのんで見守りました

三分五分二人は次第に向岸に近付いて

行きます。そして、遂に向岸に懸架が

れた舟に乘移つたてはあります。人か、しか

も大膽に棒をさして帰つて来るのです
「危い」

期せずして同じ言葉が皆の口から出ました
然し二人は夢中で棒をさしてゐます

再び同じ気持の三分五分が繰返されました
そして今將に後五米で岸につかんとする
時、「アツ」と一人が倒れました。残り一人
はすかさず水にとびこんで舟を岸につけま
した

待つてゐた部隊よりは將校一兵三回名が舟
に乗り移ると、又も向岸に棒をさして行く
のです

雨軍の銃声は一層烈しくなりました
三度同じ氣持で見守りました
それから十分、掩蓋の陣地はこの四名に依
つて占領されました。これが人間業で出来
ることです。然現実には確かに陣地上に
日の丸が振られてゐるのです

蘇州河の戦い
遺骸より部隊名も氏名も全然判つてゐませ
んが、是等の人達の勇氣に感嘆すると共に
（倒れた勇士がせめて負傷だけであつてく
れるやうに）と祈りました

蘇州河 渡河戦

歩四七 Ⅱノ16

歩兵軍曹 羽田野 達見

雨雲低く垂れ 秋雨江南の平野に煙る
蘇州河の敵は日軍一兵も渡河せせずと 対
岸一帯に一線・二線と防禦陣地を構築して
居ます
我が部隊は連日連夜不眠不休の追索又追索

0325

313

連日の雨のために膝迄ぬかる悪路を蘇州河へ蘇州河へと進軍しく十一日夕刻には早くも渡河態勢をとり明日の準備を整へました

我部隊は陣地につき明日の積火吐く蘇州河対岸陣地に適確なる射撃を行ふべく準備し機関銃も又攻撃準備を整へその威力を發揮しやうと自覚ましいものでありました愈々壯烈なる敵前渡河戦の火蓋は切られました我軍の一斉射撃につれて我々の機関銃も又対岸の陣地に猛射を浴せす見事に命中です

敵も陣地の窓より機銃及小銃の掃射を始めそのために戦友は一名倒れ三名三名と六小銃に敵も却々倦りかたいものがあります

追撃砲弾は唸りも生じ無氣味な音をたて、頭上を掠めて行きます 対戦中に数時間

我々の銃砲声は蘇州河畔に漲り黒煙を吹き上げる砲聲 突に物凄いはかりの光景です

地物を利用して一歩々々進軍 敵の掃射を受けて殞じた戦友を踏み越え、敵陣に躍り込みました

斯くて激戦数時間にして敵の陣地を打破り遂に敵は退却を開始しました

重火器の掩護下に渡河開始 續いて果敢なる進軍を以て対岸一帯を占領しました。うして敵前渡河は成就したのであります





下手な支那語
で危機を免了

歩四七ノ五四

歩兵曹長 入學 磯藏

昭和十二年十一月十二日早朝蘇州河敵前渡
河を次行い敵を潰走せしめ、我聯隊は續い
て猫追虫に移りました

その時中隊長松田大尉殿は長谷川聯隊長殿
より

松田大尉ハ機関銃ニ小隊 小銃一小隊ヲ
以テ 安亭鎮西方橋梁ニ至リ敵ノ退路遮
断ニ任ズベシ

この獨立任務を受けりし直ちに所命の兵力
を率いて進發せられた

當時自分は命令受領者として傳令と一名建

此 聯隊本部と共に安亭鎮に向つて前進中
でありました一六〇〇頃友軍の飛行機
より

敵大部隊ハ上海方面ヨリ崑山ニ向ツテ退
却中ナリ

この通報に接し 聯隊長殿は

尖兵中隊ハ直チニ安亭鎮ヲ占領セヨ

と命せられ聯隊本部も駆足で安亭鎮に前進
しました

一七〇〇頃安亭鎮に到着すると 聯隊長殿

は所帯の傳令を連れ橋梁附近に來り此

オイ 第三機関銃中隊の命令受領者は居

らんか

と大声で呼ばれました 自分け

ハイ

と返事して聯隊長殿のところに行きました

オイ命令受領者 松田大尉は見えな

何処に居るのだ

と言はれましたが 返事だけでも自分に
も判らす。そこで

「聯隊長殿今から捜しに行つて來ます」と
言ひますと

「うん 早く捜して此處に來る様に松田大
尉に言へ」

との事です。自分は一先で聯隊本部の位置
に引返しました。其の時既に日が暮れて
五十米位近づかうすげんやりと見える程度
の明るさでした。その上嫌な雨は降り出して
來る。心細く思ひ乍ら

(さて何処を捜してみやうか。鬼は角道路
迄出て聯隊長殿より命令を受けた所迄行
つてみやう)

と中野一等兵を連れて本道路上橋梁の處迄
行くと向ふから人の話声が聞えます

「うん占めた。あれにてつきり中隊長殿が
居られるだらう。一寸待つてみるか」

と中野一等兵と共に橋梁上に脚を掛けて休
憩してゐますと話声は段々近づいて來ます

約三十米位近づいた頃自分が
「おい、第三機関銃中隊がやないか」

と呼ぶと
「おい」

と返事をしますが何だかおかしい
(どうも変だ)

と六感にピンと來たのでよく透して見ると
傘や蓑を着た奴が四五十名とん／＼やつ

て來ます。支那兵です。もうその時は二十
米位に接近して居ました

「おい中野この下の田圃に飛込め」
と言ひますと中野一等兵は

「班長殿射毒ませうか」
と言ひます

「いや染つちやいかん。早く飛込め」
と言つて自分も下の田圃中に飛び込みまし

た

それと同時に支那兵は自分達が休憩してゐた所迄来て立止りました

「中野駐来ではいかんぞ、速歩で向うの水

車小屋迄行け」

水車小屋は現在地より十米程高くてありま

す

中野水車小屋迄行つたり射撃準備をして

ろ

と小声で命じ自分も速歩で行きながら

（もう支那兵が射つかんぞ）

と思ひ／＼水車小屋附近に近づいた頃支那

兵の方から

誰呀

誰か？

と呼びました、自分は下手な支那語で

「我還是中國兵耶」

「俺も支那兵だ」

と答へますと通じたのが向ふへ行き始めま

した、よく遠くを見て見ると後から／＼四五

十名一團となうて退却の様子です

直ちにこの状況を聯隊本部に報告しますと

帰つてゐられた聯隊長殿が

「さんぞうか」

と當時予備隊であつた第一機関銃中隊長小

本中尉殿に橋梁の守備を命ぜられました

自分も小本中尉殿と共に前方の北東迄やつて

来ますと敵は尚もド／＼退却して居ます

山本中尉殿は指揮する小銃小隊を道路側に

潜伏せしめ退却する敵を片々端から捕獲す

る、刺殺するといふ具合にやりました、然

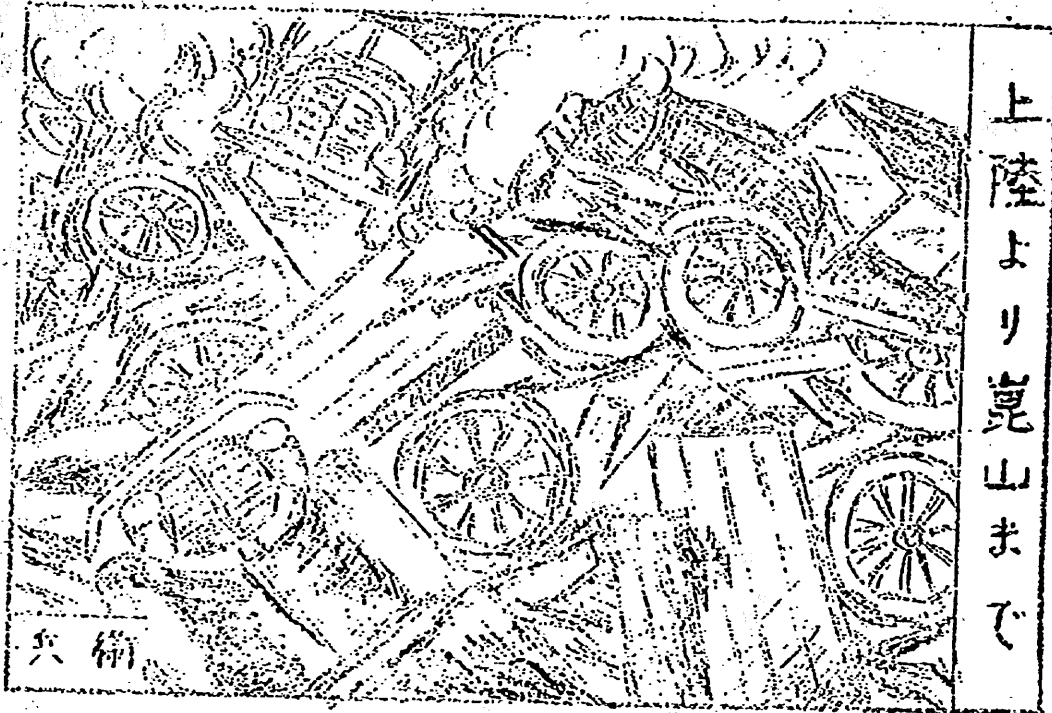
し遂に敵も感付いたのか、後に打退却して

来なくなりました

そして自分も小銃手四五名を借りて中隊長

殿を捜し出し、無事任務を遂行することが

出来ました



上陸より崑山まで

兵衛

上陸より

松江附近まで

騎兵衛兵 座談會より

児玉権藏伍長

杭州湾上陸の際私達が乗り移った小蒸気船に火災が起りました どうした譯かがソリンに引火したのが因だつたのでせう 岸までは未だ大分遠い時でした

掛りの工兵が心配して信号などしてゐるうち 後方を護衛中の他の船に救助され幸うじて全員事なきを得ました

この時工兵は鎖を船底に置いておた為めそれを取らうと一人が一生懸命になつてみよした 分隊長は

危いから止せ

と注意しますか

焼いては中絶ない

と殆ど喧嘩せんばかりでした。そして火

中も構はず銃を構んで来ました。大分火傷

しておりました

その工兵の責任感の旺盛なことに同感致

しました

船はずつかり焼けてしまひました

又上陸の際馬だけ先に下したものですか

ら馬は岸の才目かけてどん／＼上ります

他の馬の先に上つておるところを目かけ

て行くのです

所が人は後から上陸して多隊困りました

何處に馬が居るやら判らないうのです。後つ

てこゝろは他隊の馬と代つてしまふやら足

らなくなるやらで、隊に依つては大分困つ

ておたところもありました

村上 船伍長

抗州湾上陸の時私等は五名づ馬九頭荷つ

ておりました

陸地は大分進みほると工兵が

早く早く

とせき立てるので最初森の上等兵隊長

殿の背衝が下りて来たところ森の首を

水は余りました

先づ馬を上げやうと馬の後ろに廻り海の

中に押し落しました

さて馬は上げたもの、人間は水深を気に

して躊躇してゐる。そのうちに馬はどん／＼

岸に行つてしまふ。気が気ではありません

ました

例にもかまひもどろ濡れになつて上陸し

た。その夜は焚火して軍衣袴や十円札など乾し

ました

荒木 渡上等兵

松江を朝出奔 一里半位行つたところ
十時半頃でしたが尖兵から

敵が出て来た

と言つて来たので、見れば向ふから白旗

を立て、やつて来ます

殺さぬなら投降するが役すもつたら迷七

す

と言ひます

こちらは雨側がクリークで狭くて不自由
ですが、向ふの田圃の敵に對しわざとさふ

時の用意怠りなく配備についでおました

岡田参謀殿は通譯を連れ先頭に出られ

交渉にあたらせました。この時の敵は約七

百名位で武装解除をして松江の警備隊に引

渡しました

當時はあちこちに敗残兵が隊を組んで

ろつておりましたが、大部隊の敵を見たの

もとん母に捕虜にしたのも初めてでした

栗屋 齊上等兵

松江から二里位行つたから經理部に頼ま

れて三名松江まで軍刀取りに引返しおした

松江に着くと兵隊達が皆手に手に双眼鏡

を持つておます。聞けば支那軍の物を多数

押収したとのこと

自分養も一ツ宛貰ひました。幸ひ私のは

兵隊が手入したものを間違つて受取らした

と他の者は埃だらけのもので馬上で掃除し

ておました

私は先頭を進み、氣になつて前方を見

廻しておました。すると前方三百米位の竹

林の近くに敗残兵が一名此方にやつて来る

のが見えおました。そして急に見えなくなり

ました

「おかしいな？」

と思ひながら

「いつかこの辺だったか……」

と傍を見よと死んだ振りをしてみつくり返つておす。眼鏡で見てみたとも知らずうまく騙し了せると思つたものでせうが走つて逆の向まで駆け込んだ證據には股がブク／＼ふく水より濡す。頭隠して尻隠さずとは此の事だせう可笑しくなつて来ました。故意と頭を近くに一発打つ教しませすとピツクリして飛び起ま一日散に逃げ出しました。

一同大笑ひして

眼鏡は重宝な物だしと遠く近く様はる敵死体を発見ながら赤隊に追及した事があります。

水上部隊と共に

蘇州河ト一ノ方攻取

歩兵衛兵 吉本中尉

機関銃二隊と共に歩兵第四十五聯隊に所属されて舟で進み出した。奥村中隊が尖兵で進み舟に白鶴汽艇にましか、りました。そこには敵が居ると云ふので行つては狙ひ赤に集中され危険がある。機関銃を持つて陸に上り歩した。果して東側部落に敵が多数居ます。その水が鏡を持つておないで突撃して行つて突撃しました。

家の中から持物が出来たのを急ぎ兵が突撃したがその水は敵の考謀です。その先で捕へたのは副官でした。此の附近は敵の毒條が多かつたやうです。

夕方蘇州河に着く予定でしたが敵が五六百居ると云ひます。その水をほつて置いては爾後の師團司令部の行動を妨害されさうなのでその水を退避して村落露営をし翌日蘇州河に向ひました。クリークから蘇州河に出るその合流点の向岸に大きなトーチ

カが二つあり又その東側の家からも盛んに
射撃して進路を阻んでおます

がマちらの兵力僅少 機関銃ニ銃ぐらひ
では仲良し出来ません

その折戻りの飛行機が飛んで来て通信筒
を落しました

敵を示せ

と書いてあります すぐ全員を以て矢形
を作つて東側の家を示しました

飛行機は一回旋回したかと思ふと急降下
爆弾を投下して忽ち家は無くなつてしまひ
ました

此の時程飛行機を力強く思つた事はあり
ませんでしたが 一方家は完全に破壊された
かトイチカは分らないと見え其の儘飛び去
りました

トイチカは制圧出来ない 萬葉盡きて沃
死隊を組織して舟で強行突破することに決
めました

クリークに舟を引べ一番先頭の舟に機関
銃をつけました 竹本伍長西平田黒木枝川
浦田等水に私の七人です

對岸のトイチカから十字火を浴せられる

今日が最後だ

と覚悟を決めた

舟に乗つた時は誰しも無言 行軍間何時

も人気が思木上等兵も西上等兵も元気の
い、竹本分隊長も平田上等兵も一言も物を
言はない

枝川

浦田

と私が呼んでも私の顔を見るばかりで返
事を致しません 悲壮なものでした

一舟に架出した トイチカは真近に無気
味な銃眼を覗しておる 機関銃は左のト

イチカを奥村中隊は右のトイチカをとり打合
せの如くザリ／＼と迫つて行く

所が左のトイチカが射たない 此れ幸ひ

と對岸に取りついて突入して来るに敵は居
ない。何となく氣合抜けがしたがおかつ
チカに敵が居る。此のトチカを利用し
ておのトチカを感んに射つた。

背後を衝か来た敵は周章狼狽を亂して
敗走する。その間に與村中隊も上陸して此
處を完全に占領更に降り出した雨の中に敗
敵を追って追索です。

小銃は軽くて早いが機関銃は重いのです。
二千と選れる。やつと安曇鎮で追及するを
得ました。

徴發の自動車で

中池參謀殿を送る

第六師團司令部

白肌 金澤

當時私は歩兵第二十三聯隊の第四中隊に

居りましたが蘇州河の手前千米位の所で准
尉殿が

早く聯隊本部に行け

と言はれますので大急ぎで本部に行きま

す

お前は自動車の運転が出来るか

と訊かれました

「はい、出来ます」

と答へます

では直ぐ師團司令部に行け

とのこと、司令部に参りました

蘇州河の道路上に沢山自動車があるから

修理をせよ

とのことで行つてみますとトラックや乗

用車が何十台となくあります。兵器部の大

山岩長殿當時位長が一生懸命修理して居ら

れました

私も新型の立派な乗用車を徴發しました

「トラツクの方が良い」と言はれるのでガソリンタンクを打貫れておろのを修理して三台修理し、四十五騎隊から茶々坂本君と二人で二台を運轉して軍の小池参謀殿を松江まで御送りすることになりました。

警乗兵は十三の小隊長殿を長とする二分隊でした。道路は黒山の標が敵死体で通れず、非常に困難しました。又敗残兵が至る所に居りますので、先介警戒して進みました。

途中青浦で一泊して松江の手前分岐の橋梁の所に来ました。時

澤山の敵が来る

と云ふので全員下車直ぐ小池参謀殿の指揮で配備につき弁候が出来ます。

此の時は皆決死の覚悟でしたが間もなく弁候が帰りました。

敵は皆武装解除された者はかりで金山崎

の方から来るのは友軍である

といふことが判り皆安心しました。捕虜は約六百名、これを引取つて呉れといふので参謀殿も困つて居られました。だが松江で收寄して賞心事に話しかつて私共は松江へ急ぎました。

松江の手前では橋が燃えつゝ、其處を二台宛笥で押して渡すなど危険なことを謀返し、松江に着きました。

翌日更に上海まで小池参謀殿をお送りするごことになりましたが、幸ひ工兵隊の船が出ることに成りましたので、翌朝参謀殿から有難い御禮の言葉を蒙りて御別れいたしました。

元来た道に引返し

十三の食糧を運搬して呉れ

このこととで警乗兵とも別れ坂本君と二台ご今度は米を第一線に運搬しました。

蘇州河から今度は強傷者の運搬、黒山の病

0336

324

院に選ばれました

この急編成の自動車隊は實に有効に活躍
いたしました

南京への轉進には彈藥食糧をどれだけ運
んだ分りません。南京の手前では野重の彈
藥を倉人に運びました

一番喜ばれたのは四十七野隊が南京攻路
に間に合はんと云ふので徹夜で折返し運轉
して野隊長殿から大褒御賞めの言葉を戴き
ました

蘇州河々畔で微奔したこの二台のトラツ
クはあれから二年有る凡少る作戦に参加し
て實によく其の任務を遂行しました
今本都自動車班にあるナンバー十一號十
二號がその時の車です

平岡副官殿と設営に行く

歩兵衛兵 丸岡軍曹

嵩山駅から町まで千米位離れておりました
その間の鉄道線路上は彈丸が飛んで来ます
私は田山上等兵入口弁軍曹と四人で平岡
高級副官殿に隨行して設営に行くことにな
りました

小銃弾がシューシューと耳を掠めるやうに飛
んで来る中も高級副官殿は平気で歩いて行
かれます

これ位の彈丸が恐くて戦草が出来るか
と恐ろたるものです

その時前方から機関銃の掃射を受けまし
た。私等は懐銀で家の中に逃げ込みますと
それが可笑しかったのか

「おっ、おっ」と哄笑一層燃々と家の中に入っ
て来られて

「元気があったぞ 死ぬ筈ぢやった」

と笑はれて又何事もなかった様ほしつか
りした足取りで燃々と進まれました

無神経といふ程度胸の大きさに私は其は實
際驚き頼みしく思はれました